

# ひろがるネット

守ってもらえる学校の間は、  
先生方に理解してもらうことをスタートに

保護者

公民館活動の中で理解を求め、  
一緒に暮らしていく地域の拠点にできないか

我々の子どもが小さい頃はこのような支援のシステムが十分ではなく、今は良くなってきたと思う。我が子も高校入学時、以前お世話になっていた小学校の通級の先生から我が子の支援の必要性を高校へ説明してもらった。「伝えないでほしい」と言われる保護者もあるかもしれないが、担任だけでなく他の教科で関わる中学校、高校の全ての先生に伝えなければ我が子のことを理解してもらえないと思うようになった。せっかく学校に行き続けることができるのだから…。先生方に理解してもらうことがスタートだと感じる。今思うのは、学校にいる間は守っていただける。そこから先を思うと不安がよぎる。縦のつながりを大切にしていだける学校であってほしい。地域の方にも子どもを理解してもらい、温かいまなざしを向けてほしいと思う。



発達障害のある子は外からは分かりにくい部分がある意味大変だと感じる。生涯にわたる一貫した連携が必要。我々が子どもを保育所に入れた頃は親の負担が大きくて、願いはなかなか届かず、保育所の先生はついてくださるが、障害のことは何も知らないという状況だった。話し合いを重ね連携がとれてくると先が見えてきた。「今の時代はいい」という思いと一方、「学校時代はいい」という思いがある。これから学校を出たあとも連携をもってやっていただきたい。毎年特振会に参加させてもらっている。特殊学級の先生や通常学級の先生にも出にくいだろうが参加してほしい。いろいろな所で公民館活動が行われるが、障害のある人も地域の公民館活動で理解してもらって、一緒に関わらせてもらいたい。将来も地域の中で活発に活動できたらいい。

<出雲保健所> 発達クリニックでの早期発見を、  
教育につなげる役割がますます重要に

福祉

<発達障害者支援センター> 学校を卒業した後もどこか  
が関係を持ち、支援を継続する必要がある

県でやっていた発達クリニックが市町へ移ったので直接保護者と話す機会が減ってきた。県として発達クリニックの研修会を行っている。雲南市での発表にあったように、今、発達障害に気付くという意味では、行政で3歳児検診でなくもう少し高い年齢で実施し、集団をみる保育所、幼稚園の方に、この子はちょっと違うぞという気付きを持ってもらえるとありがたいし、それを各市町の発達クリニックにつなげていただけるといいと思う。2月に研修会も企画している。今日各教育委員会の取組を聞いて感じたのだが、うちの役割は早期発見を教育につなげ、他の機関と連携を大切にしていこうと実感した。



中学生、高校生、成人の方にはソーシャルスキルトレーニングを重ね、トラブルが起きた時などに関わりやすくなるという方が多い。これは小さい方でも成人でも有効。学校にいる間や成人でも元気で毎日出てこられている方は相談機関が関わるのでいい。しかし、成人の方でも特に親御さんと離れている方は、健康の確認さえ難しくなってしまう。そういう方と接する方法は課題が大きい。知的に伸びなかった方や精神疾患が二次的に出ている方は生活を考えると手帳や年金が必要になるがそういう相談も含め、関係機関が卒業後もどこかでコミュニケーションをとっていくことが大事であり、生涯にわたる支援の必要性を感じる。

<県立看護短期大学> 早期発見とその人に合った  
教育支援計画があれば大きく変わる

大学

<島根大学> 保護者が変わり子ども先生が変わる、  
教育的井戸端会議が「顔の見える関係」の原点

発達障害のいる割合について話があったが、アメリカではLDということで10%と言われている。自閉症150人に1人ということが言われていて、日本ではまだ理解されていない部分もあるのかなというふう思うし、小さい頃は見過ごされて、大学でみつかるといふこともある。こういう子の就労は課題だが、脳科学の研究の立場から言えば早ければ早いほど脳の可塑性という意味で何とでもなる部分がある。要するに、3歳から12歳までのうんと発達する部分を、早期発見してその人にあった教育支援計画を立ててあげられれば大きく変わってくると思われる。「育て方」といわれたのはそのことだろうと思う。まとめてみれば早期発見が大事だと思う。

いろいろな意見が聞けて良かった。通常学級の先生方も前向きにがんばっておられる。悩みも多いが、相談や受診の後、保護者が子どものいいところををほめるようになったことで、子どもが変わり、先生方が変わってこられる様子を見ている。前向きな教育的井戸端会議で情報交換することが大事。「この方向でやっていこう」という思いになることが「顔の見える関係」の原点ではないか。医療側としても家族、先生方の気持ちを調整する形で対応したいので遠慮なく使っていただきたい。保護者の代表が話して下さったが、親御さんが先生に話されるのは、子どもにいい教育が受けさせたいからという学校教育への期待と受け止めたい。

## Q：広域特別支援連携協議会とは？

A: 特別な支援を必要とする子どもの明るい未来のために知恵と力をあわせる目的でつくられた会です。

特別な支援を必要とする子どもやその保護者のために、教育、医療、保健、福祉等に関わる機関によって結成された会で、平成17年度から毎年2回、これまで4回話し合いを行いました。出雲教育事務所管内では出雲市、雲南市、奥出雲町、飯南町、斐川町の5市町の教育委員会単位でも特別支援教育の協議会や推進委員会を設置し、地域で気軽に巡回相談などが受けられたり、先生方に必要な研修が受けられたりするような体制づくりを進めているところです。

## Q: 誰がメンバーなのですか？



A: 保護者、教育・福祉・大学・医療関係者等21名です。他にも巡回相談員や専門家チームがいます。

出雲教育事務所管内の保護者2名、教育委員会5名、各市町の保育所、幼稚園、小・中学校から5名、保健所1名、発達障害者支援センター1名、島根大学医学部1名、島根看護短期大学1名、養護学校1名、事務局4名計21名です。いろいろな立場の人の意見を聞き、関係機関の横のつながりと保・幼、小、中の生涯にわたる縦のつながりについて話し合えるようなメンバー構成にしています。また、他にも6名の巡回相談員、7名の専門家チームが現場からの相談等に対応できるようにしています。

## Q：今までどんなことが話されましたか？

A: 各市町での取組を報告し、どのようにしたら地域で一貫した支援ができるか協議をしています。

平成17年度当初、「各市町教育委員会で協議会を設置し、話し合ってください」と県からお願いし、各市町で進めたことの成果や課題を報告してもらっています。そして、保護者や教育関係者、また、医療や福祉の関係者が、どのようにしたら地域で一貫した支援ができるか協議しています。7月の協議会で「顔の見えるシステム」「保護者同士のつながり」「具体的な個別の教育支援計画を介した連携」という取組の指針が出されました。

## Q：話し合いで何か変わりましたか？

A: 各市町で巡回相談や保・幼、小、中の連絡会、現場に必要な研修が行われるようになってきました。

各市町で支援の必要な子の相談体制が整ってきています。また、小学校や中学校で特別支援教育コーディネーターを指名してもらっていますが、その研修会が各地の実情に応じて行われてきており、回を重ねるごとにいい実践の報告が聞かれるようになってきています。これからは、各地の取組の様子や、話し合われた情報を広く発信し、次の行動(アクション)につながるようにしたいと考えています。

## 「顔の見えるシステム」「保護者同士のつながり」「具体的な個別の教育支援計画を介した連携」 第2回広域特別支援連携協議会が開かれました

平成19年2月22日(木) 出雲合同庁舎602会議室

今回の話し合いでは、各市町での取組の報告が行われ、4回目になるこの会合で、それぞれの市町が一歩ずつ取り組んだことが確実に成果に表れていました。

また、協議では、前回まとめられた「顔の見えるシステム」「保護者同士のつながり」「具体的な個別の教育支援計画を介した連携」のキーワードを意識しながら、「早期の気づきを巡回相談や医療へつなぐことの重要性」や「保・幼、小、中からさらに高等学校へつなぐ大切さ」また、「支援を必要とする子の学級担任が見通しの持てる研修や校内体制の在り方」など各委員から具体的な意見が出ました。また、保護者からは「学校までの支援を卒業後の地域や就労への支援につなげるのが重要ではないか」という意見も出さ

れ、今後の話し合いの焦点の一つになると思われました。

会長が最後に「『広域』には横に広がる空間の広さもあるが、縦につながる『時間の広域』もある」とまとめられました。今後も子どもの明るい未来をめざし、「広域」につながるための知恵を出し合い、情報発信したいと思います。今回は、協議会に出た意見の要旨をまとめていただき、御意見、情報をお寄せください。



**<出雲市> 「わくわく相談会」をはじめとして学校を支援する体制が整備されてきた**

「わくわく相談会」（巡回相談）で4名の特別支援教育の指導員が幼、小、中をまわっている。通常学級を対象に行い、子どもの困り感に寄り添う支援の在り方を11校30人について話し合った。それぞれの子が大きな困り感を持っており、チームでの支援を心がけた。保護者への広報も大事にしたい。また、市として今年度学習支援を含めた特別支援教育ヘルパー、学校生活全般の支援にあたる特別支援補助ヘルパーを計32名。幼稚園にも幼稚園ヘルパーを配置した。来年度は就学前の子の支援にも重点を置き、幼稚園の通級指導教室へのヘルパー派遣を検討。就学指導委員会の幼児版、就園指導委員会（仮称）の必要性も感じる。今年度、第三中学校へ通級指導教室ができ、保・幼、小、中への連携体制に生かしたい。これらの取組で子どもの自尊感情や自己肯定感が育っている。今後は保・幼、小、中の緊密な連携で分断しないような取組にしたい。教員集団が研修により専門性を高め、協働して取組み、理解教育を推進することも大切。

**<雲南市> 幼児、小・中対象の各研修と継続的な巡回相談を進め、昨年より一歩前進**

幼児担当を対象に「幼児期における障害の気づき」というテーマで、小・中学校の特別支援教育コーディネーターを対象に「中学校における特別支援教育」というテーマで研修を行った。これらの研修は、相談支援チームとして通級指導教室担当、保健師が集まって情報交換会を行い、今現場で必要な研修は何か考えて決めた。また、3歳児検診や幼児の相談をどう発達クリニックにつなげ、保・幼、小、中までつなげるかが課題だったが、今年は、幼稚園、保育所に継続的に巡回相談を行い、関係機関につなぐことができ、一歩前進した。子どもの実態を把握でき、先生方の対応の仕方も変わってきた。これからは、年間をとおした小、中、そして就学前の幼児に相談に出かけられるシステムづくりが必要。また、そのためにも幼稚園にコーディネーターを置くことが必要ではないか。それから相談支援チームの体制の充実が必要と思われる。また、特別支援教育の情報発信が大事と思い、メール等で発信した。

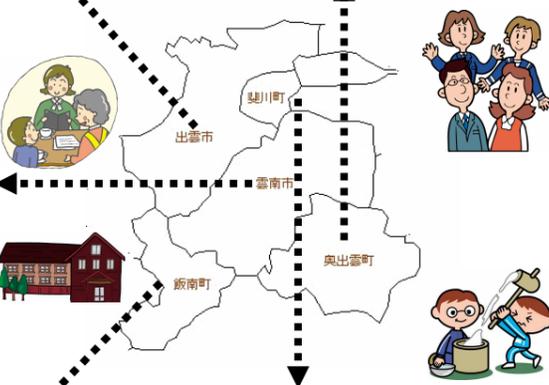
**<飯南町> 保育所と小中の連絡会で支援をつなぐ体制 3月に連携協議会立ち上げ**

町内の保育所と小中学校連絡会の設置を10月に行った。飯南町ではほとんどの子が保育所から高校まで同じ地域で教育を受けてきており、小中高については連携を図ってきたがそこに保育所との連携も加えて設置した。保育所から小学校、小学校から中学校への支援が切れないように、また、早期から観察と相互の連携により子どもたちにとってより良い支援がうけられるような体制整備ができてきた。今後、互いの現場へ訪問を行ったりしたい。また、飯南町特別支援連携協議会を3月中旬に正式に立ち上げる予定。これにより研修会を開催し、ケースにも迅速に対応したい。今後、具体的な活動を計画し、各方面から相談を受け入れたい。広域巡回相談員による巡回相談を町内小学校1校で実施していただいた。町で専門的な知識をもった人が少ないので外部から保護者の相談にも対応してもらえ、ありがたい。今後「特別支援教育に関する専門的知識と指導力」と「組織の中で調整役として機能する資質や能力」を育てるための取組が必要と考える。

**各市町関係機関の連携で 横にひろがるネットワーク**

**<奥出雲町> 巡回相談を幼稚園で実施 連携協議会は来年度当初に設置予定**

奥出雲町では今年度、幼稚園から奥出雲町教委を通じて申請し、1月に広域の巡回相談を行い、事例検討会を実施した。支援の必要な幼児について幼稚園、小学校関係者が集まり収穫が多かった。また、仁多郡教育研究会特別支援教育部において教育センターから講師を招き、『個別的教育支援計画』についての研修会が行われた。来年度に向けては、個別的教育支援計画策定に当たっての体制づくりを検討したい。また、今年度予定されていた特別支援教育連携協議会の設置ができなかったため、来年度当初に設置したい。



**<斐川町> 教育委員会が保護者と「顔の見える関係」で「滑らかな就学支援」を**

斐川町では連携協議会を7月に設置。就学前の取組として、保健師、通級指導教室担当、教育委員会が会し、滑らかな就学支援につながるよう就学予定の特別な支援が必要な幼児及び3、4歳児の情報交換を実施している。また、保護者が参加する「特殊学級、特殊教育諸学校の見学会」を「おもちゃの家」が継続企画し、就学担当者も参加している。いきなり就学前の顔合わせでなく、事前に「顔の見える関係」をつくっておくことが大切と感じる。保・幼から小への連携はスムーズだが、小から中の連携に課題。西中に設置された通級指導教室を生かし、保・幼、小、中の一貫した支援につなげたい。中学校の通級は町外からの利用も含め、今後一層活用が図られるようにしたい。来年度の特別支援教育コーディネーター研修が来年悉皆なら、町としては中学校区での小中の連携を含めた情報交換を行いたい。

**保・幼、小、中の連携で 縦につながるネットワーク**

教育委員会報告後、次の質疑や協議が行われました。  
①斐川町の「いちごの会」や奥出雲町の「三成児童館」など各地の療育活動が果たすネットワークについて  
②教員免許の有無を考慮し、支援内容や方法に合わせて派遣している出雲市のヘルパー制度について  
③今後利用増が予想される中学校通級指導教室について

**出雲養護学校の果たすセンター的機能 養護学校**

出雲養護学校では、特別支援教育コーディネーター3名が直接幼児や小、中学生の教育相談に出かけ、センター的機能を果たしている。また、中学校の特別支援教育コーディネーター研修を12月に実施し、小、中、高等学校、養護学校の連携等について情報交換を行った。



**通常の学級担任の悩みを受け止めるような研修を進めていくことが必要**

今、苦しんでいるのは通常の学級で支援を必要としている子。その担任の力をどう高めるか、悩みをどう解決していくか。それには、本人、保護者、地域に対する理解教育と通常の学級担任が直接研修ができる機会が必要。また、特殊学級側からでなく、通常の学級側からの情報発信も大事。人権問題に関わり、保護者が触れてくれると言われる場合もあり、障害に理解を得るのは難しい。すでに通常の学級でいい実践を行っている教員がいるので、出雲市内の各ブロックそれぞれで実践家を呼んで研修を始めている。特殊教育の研修に比べ、通常の学級にいる子については、改善できる部分と社会との関係で改善しにくい部分があるが、担任のうまくいかない不安定な思いを共感的に理解しながら進めていく研修が必要である。

**<幼稚園> コーディネーターは「担任のつぶやき」を支援や相談につなぐことが大事**

本園は大規模、6クラス180人。気になる子は増えている。コーディネーターとして研修とリーダーシップの大切さを感じる。専門医の協力も得ながら資質向上を目指した。コーディネーターの大きな役割は「担任が悲鳴を上げる前のつぶやきを大切にすること。毎朝15分の朝礼時、各クラスから「つぶやき」に近い小さな心配事も遠慮なく話してもらおう。そこで大切と思われることをとりあげ保護者面談などにつなげた。園内委員会は月1回全員で行い、通級や専門医の指導を受けたらすぐに共通理解している。さらに個別の指導計画、教育支援計画を作成し、活用することで職員の資質も向上し、子どもを見る目が変わってきた。悲鳴になる前の「つぶやきを共有する」ことで、いい方向に向かっている。

**幼 児**

**<保育所> 在宅、保育所の子育て支援策が重要 情報発信しながら教育機関へつなぐ**

保育所が児童館と兼ねているので、情報発信しながら教育機関とつないでいる。「うちの子はサポートをつけるような子でない」と理解が得られなかった保護者に、3歳児検診から医療、学校へと地道にねばり強くつなげていったことでやっと理解が得られ、サポート体制が組めるようになった。「個人情報の保護」も大切だが、子どもの発達を支援するためには、保護者の了解を得て、情報を共有することが大事。「顔の見えるシステム」を進め「滑らかな接続」につなげたい。特に医療と教育機関のところで小さい時に情報発信をしていきたい。現在、「保育所」や「在宅」の子への子育て支援を積極的に展開している。そんな場に医療関係の専門家がおられると保護者が真剣に話を聞いてもらえるのがありがたい。



**中学校 「子ども」に学ぶ姿勢を大事に実践 親の「育て方」に踏み込まざるを得ない場合も**

本校の生徒は生徒指導上の問題も絡み、日々の苦勞が大きい。ただ、『子どもが先生、生きた教科書』、教員が生徒から学ぶ姿勢が大事。私も特殊教育の免許はあるが、発達障害に関しては白紙からのスタートで実践から学ぶことばかりだった。授業を継続する中で、以前の『ボケ！ハゲ！』という言葉が、『おい、〇〇！』に、去年の夏から『〇〇さん』『〇〇先生』と変わり、気持ちも落ち着いた。学級担任の心労を心配する。時には指導の疲れが一度に出る教員もある。崩壊した家庭の場合は教員の指導にも限界がある。持って生まれた『素質』もあるが、『育て方』もあると思う。時には家庭教育に踏み込んでいかざるを得ないし、行政側の関わり方も大切。前回苦言を呈したが、最近、町内の保・幼、小、中の風通しがよくなってきた。

**小 学 校**

**実践の共有化と相談利用で学校が変わる 専属で動ける支援チームが必要**

私の勤務する雲南市の小学校では特別な支援の必要な児童に対する対応の仕方をみんなで学び、情報を共有してきた。そうすることで、ある学級の実践が他の学級にも応用できることがある。子どもの見方についても研修し、良くなってきたことを積み上げてきた。専門医にも何度か話をしていただけ、いろいろな所に相談できるようになった。一步一步必要感を感じながら進んでいるところである。相談については雲南市の相談員に働きかけている。今後、雲南市の支援チーム専属ですぐに動いてもらえる方がいるとありがたい。

